幕末の超常現象ファイル『仙境異聞』に確認できる木剣儀礼の一考察

玉木晃仁

【はじめに】木剣　―寅吉の証言によれば―

『仙境異聞』の概要は、生まれつき霊感の強い寅吉が、文化九年（一八一一）七歳の時、東叡山の麓の五条天神の境内で謎の薬売りの老人に、常陸国南台山の仙境に導かれた。天狗の修行をすることになり、岩間山住む杉山僧正（山人　天狗のような存在）の従者になった。十四歳までの七年間の仙境にいた経験を話したことで、巷で大きな話題を呼ぶ。それを耳にした平田篤胤（一七七六～一八四三）は、当時十五歳の寅吉が居候していた山崎美成（一七九六～一八五六）の家から引き取り、自宅に住まわせ、幽界の存在、多岐にわたる異界の事柄を聴取・筆録した超常現象ファイルである。

研究が進み、『新修平田篤胤全集』を平田篤胤の思想研究のテキストとすることに考慮が必要とされている。[*1] また『新修平田篤胤全集』第九巻所収『仙境異聞』は、平田篤胤死後、平田塾によって清書され流布した本である。遠藤潤氏によれば、複雑な編成過程を経て結晶化したテキストであることが証明されている。[*2] さらに今井秀和氏によると『仙境異聞』における寅吉の語りが、当時の江戸文芸そのものか、あるい和漢の古典知識に基づくことを論証されている。[*3] 本稿の目的は、江戸時代後期の日蓮宗修法の木剣儀礼の考察である。『新修平田篤胤全集』所収本が幕末期には成立していたことからテキストに使用する。

寅吉の証言によると、平田篤胤に出会うまで、日蓮宗富士派（実際は日蓮宗）の覚姓寺に約三か月奉公。[*4] 日蓮宗身延派の宗源寺（現在は単立日蓮系寺院）で剃髪し一年一か月滞在した。目的は日蓮宗の秘事習得を杉山僧正から指示されたからなのだという。聴取のなかで日蓮宗の木剣について、

木劔を佛道より取れる如く思へども、此は師に聞たる説あり。まづ劔といふ物、此國には神世より有し物にて、劔をもて咒ふ術は元より有しが、眞劔にては差支ある故に、木に作りたるが、外國までも傳はり、後に種々附會をなし、日本にて世間に木劔の咒禁を用ひたるは、役行者が始にて、其より山伏に傳はれるを、眞言家また日蓮宗までも、思ひ〳〵に何くれと書付て用ふる事となり、また九字の事は、誠は劔カイと云ふわざにて、此はもと神代の劔法より出たるにて、切る狀を爲すには、何の事もなく一二三四五六七八九と云ひ、十字を切るには十といふが本なるを、臨兵云々は後に付けたる唱言なりと、師に聞たり。然れば木劔九字切るわざ、共に元これ神世の遺法なるを、修驗者などの用ふるは、返りて神の道を眞似ぶなるをや。[*5]

木劍は仏教から取り入れたと思われていますが、このことを師匠（村山僧正）の教えによれば、「最初に劍は、此の国には神世（日本の神話では天地開闢から神武天皇の前の時代）から存在していた。劍を使用して、まじなうことは元々あった。真劍（本物の刀劍）では支障があるため木で作った。それが外国に伝わり、時代が下がるにつれ、多様な附会がなされていった。日本で呪い・まじないに、**木劍を使用した最初は役行者であり、それが山伏に伝わり、真言家・日蓮宗までが思うがままに書き付けて用いられるようになった。**また九字は、劍カイと称する技で、これは元々神代の劍法から生じた。切る姿は、ただ一二三四五六七八九と唱え、十字を切るときは十と唱えるのが本来の姿であったが、臨兵云々は後に付け加えた唱える言葉である」と、師匠から聞いた。それならば木劍九字は、もともと神世の遺産の法であるから、修験者が用いるのは、神の道を真似ているのだ。

木剣について、寅吉が杉山僧正から聞いたことで、注目する部分は、原文の線を引いた部分　要約の**太字の部分**である。

補足すると『仙境異聞』の中で、寅吉は随所に、山崎美成が寅吉を調査し箇条書きにした著作『平兒代答』を批判、決めつけで言ってないことが書かれていること。世にでている『平兒代答』を全て焼いて欲しいとまで言っている。木剣についての証言は、初めて平田篤胤に語ったことになっている。

今日の日蓮宗修法は、木剣を用いて九字を切る儀礼が主流であり、特色ともいえる。成立時期が不明瞭かつ不明な相伝書（伝書）を除き、実は木剣を使用して九字を切る木剣加持を明記した資料的初見が、幕末に成立した『仙境異聞』のこの箇所である。日蓮宗側の資料で木剣を使用し九字を切る儀礼が確認できる最も古い資料は、明治二十一年（一八八八）出版　斎藤巍鑒『法華験家訓蒙』である。文献に残りづらく、秘密のベールに包まれた世界が日蓮宗修法の特色なのである。

本稿は『仙境異聞』において平田篤胤および門弟（以下　平田一門）は、木剣が修験道を起源に、真言宗・日蓮宗で使用されるようになったと考えた理由の検証を通して、幕末期の日蓮宗修法の木剣儀礼を推理することを目的としている。

【平田一門が考えた木剣起源の推理】

今日の日蓮宗修法儀礼に、「御加持頂戴（おんかじちょうだい）」または「御加持を受（う）ける」ともいう作法がある。檀信徒には好評であり、布教効果がある。

佐藤光春（一九二四～二〇〇二）は、御加持頂戴の必須アイテム「撰経」について「撰法華経のこと。日蓮大聖人が佐渡ご流罪中、最蓮坊日得上人の要請に応えて、お与えになった法華経の肝文である。日蓮宗加行所（大荒行）で

は、百日加行中、三十五日の自行成満後、書写行に入ると、序列順に読経堂で、この撰法華経をすき写しする。火気のない広い堂内で、立会の先輩僧の注視のもと、十時間に近いこの書写行中、手洗いに立つことも許されない、全員の撰経書写が終わると、ご宝前に供えて、伝師が開眼し、指定業者に托して表装し、金襴の撰経袋に入れて胸の上に下げる。修法師が修法祈禱のあと、必ずこの撰経を両手に捧げ、日蓮大聖人ご選述の「撰経頂戴文」を誦して信者に頂経させるのは、宗祖直授の撰経をもって、一切衆生の闇を滅せんとの大信力発揚の化儀である。（下略）」[*6]

アンダーラインの部分を補足すれば、修法師が、勧請・読経・木剣を使用し祈禱肝文に合わせて九字を切る。その後、撰経頂戴文を唱えながら、御祈祷を受ける信者に大荒行のカリキュラムで書写した撰経を、頭・肩・背中、求めに応じて信者の痛い部分に当てる儀礼で、この儀礼が「御加持頂戴」と称される。

日蓮宗修法の「御加持頂戴」は、真言宗智山派大本山成田山明王院神護新勝寺（以下　成田山）の「天国宝剣頂戴（あまくにのほうけんちょうだい）」または「天国宝剣加持（あまくにのほうけんかじ）」と称される儀礼と酷似している。

成田山の天国宝剣頂戴は、本尊の不動明王の剣である天国宝剣を金糸の袋に包み、参拝者の肩にあて無病息災を祈るという修法儀礼である。この儀礼は真言宗智山派の中でも、成田山と関係した寺院の独特の行事で、成立時期は判っていない。成田山の儀礼に注目する理由は平田篤胤の青春時代から続く関係からである。

平田篤胤は雄弁家であり、話術に長けていた。[*7] なまりの強い東北　秋田から出奔し、平田家に養子に入るまで、多くの仕事を経験した。その中で、五代目市川團十郎（一七四一～一八〇六）と関係があり、役者修業から話術を磨いたかもしれないと、多くの研究者が指摘するが、詳細は不明のようである。

市川團十郎は初代から今日の十三代に至るまで、成田山と縁が深い歌舞伎役者の一族である。市川宗家のみ披露ができる歌舞伎演目『成田山分身不動』がある。内容は、大伴黒主は小野小町への交際を断られる。諦めきれない大伴黒主は煩悩の地獄へ落ち怨霊となり、小野小町を苦しめる。一時は不動明王の怨親平等の慈悲の導きにより共に救わ

れる。黒主は妻子ある身で小町を諦めきれなかった自分自身を悔み、不動明王の利剣を自ら貫いて自殺する。その後、不動明王の霊験により成仏得脱し金剛界の不動となり胎蔵界の不動と一体分身となる。右手を胸の前で握り左手三方を持つ「にらみ」は、悪霊病魔を祓う不動明王の分身である市川團十郎に睨まれると無病息災でいられるという。

宮智麻里氏によれば、「明和元年（一七六四）の巡行開帳の宝物の中には「宝劔」があり、本尊と並んで「天国宝剣」が人々の信仰を集めたことが伺える。『成田山分身不動』の内容から考えて、元禄十六年の江戸出開帳においても「天国宝剣」が宝物として出開帳を飾ったと考えるのが自然である。『成田山分身不動』の黒主が利剣を呑んで息絶える設定だったのかは不明であるが、それが不動尊像だけでなく、利剣を想起させる「天國の宝剣」を宣伝する目的であったのは明らかであろう。[*8]」と論考されている。江戸中期には天国宝剣加持が存在し隆盛であったことが確認できる。

平田篤胤が市川團十郎の元にいたのであれば、当然天国宝剣のことは知っていたはずである。それより『成田山分身不動』は、江戸で知らない人がいない程有名だったようである。

日本で呪い・まじないに、木剣を使用した最初は役行者であり、それが山伏に伝わり、真言宗・日蓮宗までが思うがままに書き付けて用いられるようになった。

この寅吉の証言を、さらに言及する。実は成田山以外でも修験道の各派で宝剣を信者に当てる儀礼　天国宝剣加持以外にも似た所作・儀礼は、枚挙に暇がない程ある。なぜ私が平田一門が、成田山の儀礼との関係を推理したのか。

新勝寺の境内に修験道の祖　役行者（六三四～七〇一）の像が安置されている。昭和四十三年（一九六八）大本堂建立記念に編纂『新修成田山史』の「二一　役行者」によれば、旧本堂の裏にある青銅造りで、高さ一・一五メートル。作者は粉川市正で、東都寒サ請中の奉納である。文化二年（一八〇五）五月に発願されて翌年に鋳造完成。十一

年（一八一四）に建立された。[*9] 今日でも佇んでいる役行者の像は、時代的に平田一門は存在を確認できる。

平田篤胤は、文化十三年（一八一六）・文政二年（一八一九）の二度、常磐・下総を訪れている。文化十三年は役行者の像が完成した二年後である。旅の目的の一つは平田学の宣布であり、多くの門人獲得に成功した。吉田麻子氏によれば、篤胤自筆日記『かぐしま日記』（文化十三年）・『二度の鹿島立』を検討し、旅の目的を、「知識人同士の交流、人々への講義と啓蒙、そして自らの学問的調査という、まさに平田学を構築し、書物として著し、人々へ伝えていくための足がかりそのものであったのである。[*10]」としている。成田山のある下総（千葉県）は、平田篤胤の門弟が多く存在した地域なのである。

日蓮宗修法についても興味深い証言がある。同じ下総にある遠寿院　現在の住職　三十六世伝師　戸田日晨師によれば、「かつての行者は「魔」と対峙する時の最後の切り札として真剣を懐刀していました。初期の相伝書の「剣形の巻」には六種類の木剣が示されていましたが、江戸期嘉永年間に遠壽院二十三世伝師の妙龍院日泰上人が、「真剣」を「神体木剣」として改変し、新たに「七本木剣」として制定したのです。それが今日に伝わっているわけです。[*11]」嘉永は一八四八～一八五五　幕末中山遠寿院流修法は、真剣から木剣が出来たのではなく、真剣を木剣儀礼へと吸収したことが確認できる。修験道または成田山の天国宝剣加持の影響については確認しようがない。ただし遠壽院修法では、木剣と真剣を併用した可能性がある。

平田一門による目撃もしくは調査をされたのならば、その儀礼をみて、成田山の天国宝剣加持同様に修験道を起源と考えたのかもしれない。それを寅吉に誘導証言、もしくは寅吉に仮託し組成された証言と推理する。

【御加持頂戴をめぐって】

今日の日蓮宗加行所（大荒行堂）は、明治九年（一八七六）に整備された正中山遠寿院大荒行堂より始まった。明

治の廃仏毀釈に対応した宗門改革の一つである。[*12]

宮川了篤（一九四三～二〇二五）によれば、今日の壮麗で迫力のある妙音を醸し出す木剣で九字を切る儀礼は、明治時代の近代への転換期に、法律により修法師による木剣を使用した医療行為が困難になった。直接患部に触れることが出来なくなったために編み出された。明治二十一年（一八八八）出版　斎藤巍鑒『法華験家訓蒙』「木剣考」を根拠に、明治十六・十七・十八年頃の創案実施された。[*13] また宮川了篤氏は、身延文庫に納められている身延積善房流の木剣の調査から、木剣を鍼灸の鍼のようなものとして使用、木剣を直に信者の患部に当てた可能性を示唆している。[*14] 木剣を信者の患部に当てる儀礼はなされていたようである。

今日、御加持頂戴で信者に当てる撰経（撰法華経）の正式名称は、「末法一乗行者息災延命所願成就祈禱経文」のことで、祈祷経とも称される。『昭和定本　日蓮聖人遺文』第三巻の続編に所収されている。続編の遺文は、編纂者により偽書の可能性が高いと認定された遺文である。真偽について議論があるが、本稿とは関係ないので言及しない。日蓮聖人の孫弟子　日像（一二六九～一三四二）の頃には存在し、日蓮宗修法にとって重要な遺文である。

御加持頂戴は、もともとは撰経ではなく木剣を信者に当てたと推理した。理由は、明治九年の加行所整備まで、撰経（祈祷経）書写の条件が難しい。

身延積善房流の加行相承次第によれば、祈祷経の相承は千日満行の上でなされる最高の深秘相承である。積善房は唯授一人相承を重んじ受法の人を制限したため、明治八年二月四日三十八伝灯現明院日等が入寂に伴い終了した。[*15] 身延積善房は、明治三年焼失、お堂が再建されなかったことも大きい。

一方中山流（ちゅうざんりゅう）の遠寿院は、元禄五年（一六九二）に遠寿院日久（一六六三～一七二八）が入行してから、享和三年（一八〇三）までの百十一年間に、遠寿院に入行のは五十八名であった。二年に一名程度の割である。ところが、文化十四年（一八一六）から文政十二年（一八二九）までの十三年間の入行者は、六十六名をかぞえる。一年に五、六

名の割である。さらに天保七年（一八三六）、八年にはそれぞれ十五名、翌九年には二十一名という具合に、年々入行者は増していった。[*16] 智泉院も含めての入行者名簿は、宮川了篤氏が、遠寿院三十四世　戸田日輝（～二〇〇二）より、遠寿院日久が入行した時より明治八年までの入行者名簿を借り受け、整理した資料[*17]には、江戸時代後期は、千葉県市川市の中山流の遠寿院・智泉院が日蓮宗修法の中心地であることが確認できる。中山流の智泉院、身延積善房流のカリキュラムが公開されている。[*18] 撰経書写についての記載はない。

寅吉が、三ヶ月奉公した覚姓寺、剃髪したとする宗源寺は、身延系であるが本当に奉公・剃髪したかは確認できない。当時は中山流が日蓮宗修法の主流であるが、平田篤胤および門弟は、相違を理解できただろうか。日蓮教団の門流独自に展開した教団史に関心をむけられなかったことは、平田篤胤死後二十六年後の明治二年（一八六九）平田塾刊行『出定笑語付録　二』（『神敵二宗論』）の日蓮宗批判から確認できる。[*19] 相承を受けていない日蓮宗系祈祷師　てつ験（げん）の可能性もある。[*20]

平田一門は、日蓮宗修法の木剣を信者に当てる儀礼を目撃し、修験道由来の成田山の天国宝剣加持と類似した存在と判断したと推理する。

【結び】

平田篤胤および門弟が木剣は、修験道を通して真言宗・日蓮宗修法で用いられるようになったと杉山僧正から聞いたと寅吉に誘導証言または、後に門弟により寅吉に仮託し組成させた理由を推理し、日蓮宗修法の御加持頂戴の儀礼の原形は江戸時代後期には存在し、信者に撰経ではなく木剣を当てていたと推理・考察した。

『仙境異聞』の寅吉の証言により平田一門は、日蓮宗修法の木剣儀礼を目撃、もしくは調査した際、成田山の儀礼修験道由来の天国宝剣加持と類似した存在と認識していたようだ。平田一門が目撃した木剣儀礼は、中山流なのか、

身延積善房流なのか、或いはてつ験なのか。本稿は、推測に依拠し、仮説の域をでない。それでも一つの可能性は提示できたと思う。木剣は私にとって魅了してやまない。

＊1　吉田麻子『知の共鳴　平田篤胤をめぐる書物の社会史』「第三部第一章平田国学の再評価と書物の社会史という視点」参照

＊2　遠藤潤「平田篤胤『仙境異聞』の編成過程―〈語り〉と書物のあいだ―」『國學院雑誌』第一二〇巻第七号

＊3　今井秀和『異世界と転生の江戸　平田篤胤と松浦静山』

＊4　池上本門寺編『日蓮宗寺院大鑑』九二頁

＊5　『新修　平田篤胤全集』第九巻　四四五頁

＊6　宮崎英修監修『わかりやすい日蓮宗の御祈祷』九五下～九六頁上

＊7　宣長の弟子　服部中庸（はっとりなかつね）は実際に京都で篤胤と初めて会い、その感想を次のように記している。（篤胤と対面し）「大道の議論におよびましたところ、篤胤の弁舌は滝の流れるがごとくであり、博覧広才であること万人に優れ、まことに宣長先生が亡き後にこのような人物はいまだ見聞きしたことなく、宣長先生の弟子は春庭翁をはじめとして五百人あまりいますが、篤胤に及ぶべき人物は一人もおりません。（服部中庸差出、本居大平宛書簡『毀誉相半書』）吉田麻子『平田篤胤　交響する死者・生者・神々』一六一～二頁

＊8　宮智麻里「成田不動信仰と市川團十郎―成田山旅宿の役割を中心に―」『佛教大学大学院紀要』　文学研究科篇　第四十三号　四十三～四十四頁

＊9　『新修成田山史』一三三～四頁

＊10　吉田麻子『知の共鳴　平田篤胤をめぐる書物の社会史』第一部第一章　平田篤胤の常磐・下総訪問　五十一～八十二頁

参照

＊11　遠壽院荒行堂　戸田日晨『日蓮宗の修法について』（編集発行　荒行堂　遠壽院）一〇頁

＊12　宮川了篤「明治期にみる日蓮宗修法史の一考察」『印度学仏教学研究』第四十五巻二号　参照

＊13　宮川了篤「日蓮宗「修法祈禱にみる木剣の歴史」」『三友健容古稀記念論文集　智慧のともしび　アビダルマ佛教の展開』三八六～三九三頁

＊14　同右　資料十七（三七九頁）参照

＊15　宮崎英修『日蓮宗の祈祷法』一六二～一七〇頁

＊16　宮川了篤「教化における言説布教と修法修行の意義」『現代宗教研究』第十七号三十四頁

＊17　宮川了篤「日蓮宗修法史概説」『身延論叢』第十六号　資料（四）二十八～三十二頁

＊18　「積善房流と智泉院流の加行御経次第相承の対比」『日蓮宗祈祷聖典』（加藤瑞光　宮川了篤編）六四三～五頁

＊19　大覚如実が後光厳天皇より祈雨の修法により雨を降らすことに成功し、日蓮聖人に大菩薩号・日郎・日像に菩薩号を授与され、大覚（妙顯寺を中心とする四条門流　妙顕寺二世）に大僧正の宣下を授与された史実に、「是モ後世ノ僧ドモノ偽リデ、夫ハマヅ是ニ大覺上人トアルハ、身延ノ住職デム」「出定笑語付録　二」『新修平田篤胤全集』第十巻四八〇頁上初期四条門流と身延久遠寺を中心とする身延門流との交流は確認できない。中世日蓮教団の門流による展開する教団史には全く、平田一門は考慮していない。

＊20　佳豊道人『道語辞典』（昭和三十九年十月一日発行）によれば、「てつごじゃ（文字不詳）「てつ」は素人、「ごじゃ」は験者。即ち素人験者のこと」（五十六頁）。かつて「てつごじゃ」とも言われていたようだが、今日では、てつ験（げん）というのが一般的である。大荒行に加行しないで、木剣加持をする日蓮宗または単立　それ以外の僧侶。在家（祈祷師まがい・拝み屋さん）のことを指す。胡散臭さも加味された意味もある。「てつ験」と謂れの由来は多種多様である。紙面の関係で割愛。

令和五年（二〇二三）は平田篤胤没後百八十年に当たる。『現代思想』（二〇二三年十二月臨時増刊号 第五十二巻第十六号　総特集　平田篤胤）が刊行。触発され本稿を上梓した。平成四年度（一九九二）立正大学仏教学部宗学科卒業論文で平田篤胤の日蓮宗批判と優陀那院日輝の対応をテーマにした。青春時代を思い出した。今日、平田篤胤の研究は進み、日蓮宗側の廃仏毀釈の研究も再考すべきだと思う。本居宣長が死んで二年後、夢の中で弟子になったという平田篤胤。胡散臭さも魅力を感じた。私と同じ東北出身。平田篤胤と都会の魅力と表裏一体の寂しさを共有したのかもしれない。拙い小稿ではあるが、平田篤胤の研究者に目を通して頂けましたら望外の喜びである。

十一月十九日午後、師父の危篤を叔母に電話、叔母の夫が亡くなったばかりだつた。その六日後　二十四日　師父玉本龍晃が遷化。喪主　法嗣の私が山形県米沢市の自坊を離れることに躊躇していた。叔父故井上春夫氏の葬儀を発表大会の前日に千葉県四街道市で司ることになり、図らずも発表の環境が整う。校正作業の折恩師　宮川了篤先生が一月二十八日遷化の報告を受ける。大切な方が二人も亡くなり、忘れられない教化学発表大会となった。

現代宗教研究所のスタッフの皆様へ

私の発表終了の後　すぐ帰れるよう便宜を図って頂き、ありがとうございました。